ハインリヒ・ベル試論

中川勇治

ハムブルクの週刊新聞『ツアイト』は1962年2月9日号から文芸欄に一連の興味ある寄稿を掲載し始めた。これは海外諸国でドイツ文学の学問的研究あるいはジャーナリズムに拠る紹介等に携わる者が，「海外におけるドイツ文学の声価」という標題の下に執筆した寄稿で，それぞれの国におけるドイツ文学の評価や声望を具体的な例を挙げながら要約的に報告している。これらの寄稿が戦後文学に言及する場合，常に重要作家として挙げられ論じられるのがハインリヒ・ベル (Heinrich Böll) である。ベルはオランダやデンマークでは殆ど戦後文学の代表的存在として扱われ，英国ではヴォルフガング・ボルヒェルトに次ぐ有望な物語作家と見做されている。こうした彼の国際的名声は西欧諸国に限らず，広く東欧ブロックにも及んでいる。たとえばポーランドではベルの作品が殆ど残らず飜訳され，西ドイツ以上の版数を重ね，広範な論議の対象となっている，とワルシャワからの寄稿が伝えている。

こうした国際的名声にふさわしく西ドイツ国内でのベルの声望も著しく高い。1951年の『47年グループ賞』を皮切りに1961年までの十年間にフランスのもの二つを含む八つの文学賞がベルに与えられている事実は，戦後文学におけるベルの重要性を裏書きする。1963年の夏，西ドイツの文芸批評家達は彼の新作，『ある道化の意見』(Ansichten eines Clowns) の評価について激論を闘わせた。この小説の評価は扨置き，論争が西ドイツ全体に及ぶ規模で行われたことほど，ベルが現在の西ドイツ文学界で占める位置を如実に説明するものはない。

小論は，以上のようなベルの名声がいかなる作品に基づくかを知るため，その概観を試みるものである。

ベルの今日の名声は1949年から1959年にいたる十年間の精力的で活発な創作活動の上に築きあげられた。1959年に世に出た長編小説『九時半の撞球』(Billard um halbzehn) はベルが処女作『列車は定刻運転だった』(Der Zug war pünktlich) 以来たゆまずに追求してきた根本的な創作主題の到着点であると同時に，彼の創作の一転期でもあった。実際この期間の著作はいずれも相互に深い関係があり，ある段階的進展の中に組み込まれる。こうした意味で考察の対象をこの十年間に成立した作品に限定し，以後の作品には触れないことにする。

さてこの期間のベルはきわめて多作で，毎年一冊か二冊の著書を公にしている。これらの作品は長編小説，短編小説，物語，風刺，紀行随筆，ラジオドラマ等種々なジャンルにわたるが，創作主題の面からは「戦争」，「戦後の混乱」，「復興後の社会」の三者に大別できる。「戦争」のテーマを持つ主要作品には，『列車は定刻運転だった』(1949)，『旅人よ，汝はスペ、、へ赴くか』(Wanderer, kommst du nach Spa ...) (1950)，『アダムよ，お前は何処に居たのか』(Wo warst du, Adam ?) (1951) の三編がある。「戦後の混乱」を扱った作品には，『だが何もいわずに』(Und sagte kein einziges Wort) (1953)，『主なき家』(Haus ohne Hüter) (1954)，『若き日のパン』(Das Brot der frühen Jahre) (1955) が含まれる。『アイルランド日記』(Irisches Tagebuch) (1957)，『ムルケ博士の沈黙蒐集』(Doktor Murkes gesammeltes Schweigen) (1958)，『九時半の撞球』の三者が第三のテーマ「復興後の社会」を扱っている。上に挙げた作品の他に，雑誌等に発表された小品，あるいは小冊子として一度刊行された短篇やラジオドラマ等が一冊に纒められ，ケルンのキーペンホイヤー・ウント・ヴィッチ社から出版されている。(Heinrich Böll Erzählungen, Hörspiele, Aufsäfze) これらの作品もほぼ上記のテーマによって分類できる。

第二次大戦は人間精神の前へこれまで想像もつかなかった，異常な現実の堆積を持ち出してきた。戦後になって創作を開始した作家達が一様にこれらの新しい現実と対決し，なんらかの形でこれを処理し克服せんと試みたことは，作家として当然な反応であったばかりでなく，一種の必然性でもあった。しかしこの試みが一度作品の形をとって定着されてしまうと，もはや問題は解決済みであると見做して他の方向を模索する人々も多かった。だがベルの場合は事情が異なっていた。戦争とは彼にとって，単に数編の作品の中へ封じ込めただけで決着のつくほど単純な現象ではなかった。戦争は作家ベルを誕生させた最も強烈な衝撃であり，彼の人生に関する問題意識の覚醒を促した根本的な要因であった。だから一見，時代問題を安易な好奇心から表面的に追い掛けたかに思われるテーマの推移は，実は戦争を契機に直面した問題をベルが徹底的に究明した軌跡に他ならない。「戦争」のテーマが創作の出発点に据えられたことは，一般的な時代の風潮に同調したからではなく，ベル個人の体験に発する。この事情はベルの経歴を瞥見するだけで容易に理解される。ハインリヒ・ベルがケルンの彫刻家の家庭に八番目の子として生まれたのは1917年12月21日のことであった。彼の家系は遠く数世紀前，信仰の自由を求めて英国諸島から大陸に渡来した人々に始まる。オランダからライン河を次第に溯ってきた祖先は常にこの大きな河を離れずに暮し，大概は都会に住居を構えていた。母の系統はやはりラインラントの農家であった。ベルの家庭の信仰はカトリックである。彼の脳裏に残っている最初の記憶は，第一次大戦に敗れたドイツ軍が灰色の集団をなしてラインの橋を渡ってゆく光景であった。彼は第一次大戦後の社会不安のさなか，ラインラントの中心都市ケルンで成長した。史上有名な大インフレーションの吹き荒ぶ時代で，失業中の父親を持つ同級生達にパンをねだられたことや，数人の職人に給料を支払うためベルの父親が大きな手押車を押して銀行へ金を受取りに行ったことなど，彼の少年期の追憶は重苦しく隠鬱な時代の不安に彩られている。1937年，高等学校卒業試験（Abitur）を終えたときは，もうナチス党

が政権を獲得した後であり，世の中は褐色に塗りつぶされていた。以前カトリック関係の少年団体で知り合った仲間が次々と「ヒットラー・ユーゲント」に吸収され，街々を行進していた。だがベルが受けた家庭教育はこの無智な団体に加わることを禁じた。彼の家庭は，父が公然と軍国主義を非難し，ナチズムを罵倒するような家庭であった。彼の母が禁令を破ってユダヤ人に情を示し，密告されたこともあった。こうした家庭の雰囲気の中で育ったベルはナチズムのデマゴギーに抵抗するだけの精神的な強健さを備えていた。卒業後ある書店で業務見習として職業教育を受けていたが，早くも翌年，勤労奉仕（Arbeitsdienst）に駆り出され，続いて召集されてしまった。職業見習期間を終えて就職し，いよいよ今後の人生を自分なりに設計しようと未来の希望に胸を脹らませている若い男が，ある日突然一葉の葉書を受取る。それは召集令状だった。この男の驚愕と落胆，その母親の深い悲哀，これはベルの短編『葉書』(Die Postkarte) の内容であるが，この背後にはベル自身の切実な体験があきらかにうかがわれる。ベルはこの召集以来敗戦に至るまで，一兵卒としてあるいはフランス戦線に，あるいはロシヤ戦線に駆り出され，20代の若さと精力を浪費しなければならなかった。しかもこの間，彼は4度も戦傷を負う。こうした若いベルの体験が処女作の中に色濃く滲み出ていることは，きわめて容易に見て取ることができる。『列車は定刻運転だった』の主人公アンドレーアス（Andreas）は23才の若い兵士で前線賜暇を終え，再びポーランドに駐留する本隊へ帰着すべく駅へ向う。帰休兵用専用列車は定刻通り運転されていた。重苦しい気持のまま中々列車に乗り込もうとしないアンドレーアスに向って，見送りに来た友人の牧師が別離の辛さに耐えかね乗車を促す。アンドレーアスは苛立って「俺は間もなく死ぬんだ」と叫び車中の人となる。特別な意識もなく発せられたこの言葉は最初なんの意味も持たぬかに思われたが，汽車が定刻通り出発してしまうと，いつの間にか彼の内部へ染み入り，重々しく実在を主張し始めた。彼の全感覚，全神経は俄に死の不安に摑まえられ休なく回転しだす。死は今やの

っぴきならぬ確実性へと変化し，彼を支配してしまう。『間もなく死ぬ，だが「間もなく」とはいつのことか』とアンドレーアスはポーランドの地図を思い浮かべながら自分に向って答のない問を発する。あと一年もすればいずれにせよ戦争は終る，だが果してその時まで生きのびることができようか，とアンドレーアスは不安な未来を打診する。しかし彼は，自分を前線に運ぶ列車が一刻の遅延もなく運転されていることの中に，死が巨大な歯車の回転のように徐々にではあるが，確実に切迫してくるのを感じ取る。こうして圧倒的な死の不安に捕えられたアンドレーアスは曾て前途に望んだ人生の夢をはかなくも想起する。音楽の勉強，ピアニストの職業が彼の夢の内容だったが，これも今となれば現実性を失い，死の不安を掻き立てるにすぎない。同じ車室の他の兵士達も同様に重苦しい気分に圧倒されている。彼等はアンドレーアスをも仲間に入れて，憑かれたように長時間トランプで賭事をやり，合間々々に火酒を呷り携行食糧をかじる。占領地での豪奢で勝手気儘な遊びや快適な暮しのことなどが話題となって，彼等の間に一種の同朋感情が生じ，死の不安も一歩退いたかのように感じられるが，所詮は現実からの一時的な逃避にすぎない。列車は相変らず定刻通りに驀進し，アンドレーアスは刻一刻と死の手の中へ引寄せられていく。彼は，抗い難いデモーニッシュな力にとり抑えられた，無力な存在にすぎない。

こうした車中の死の不安とそこから生ずる苦悩が，誇張のない抑制のきいた文体でレアリスティックに描き出され，そのため戦争という巨大な営みの中の無力な個人が具象的に浮かび上ってくる。この点にこの物語の持つ真実性が見られる。しかし物語の後半に至り，アンドレーアスとポーランド人娼婦オリーナ（Olina）との間に生れた愛情が中心に据えられると，その仮空性あるいは虚構性が目立ち，前半のレアリズムから遠く離れてしまう。たしかにオリーナとの愛がアンドレーアスの死の不安を解消し，彼に一瞬生命への希望を抱かせることは疑えないが，真実性に乏しく説得力に欠けている。このように次元の相違する描写が一つの作品の中に共存すること自体，ベル

の未熟を語っている。だが死の不安に愛情が対置せられていることは，構成の未熟にもかかわらず，ベルの人間観を暗示するものとして記憶されねばならない。なぜなら愛情による人間の救済は彼の今後の作品で重要な位置を占めるモチーフであり，同時に作家ベルのモラルを示すからである。

以上のようにベルはアンドレーアスの個人的な死の恐怖感を中心に据えて戦争を描き出した。もちろん短編小説の限られた範囲内で戦争が全体として描き出されるはずはない。しかしベルが処女作執筆に当って自分の戦争体験のうち最も強烈な部分に作用され絶叫的な死の恐怖を題材としたため，作品に直接的な現実感が生じたとしても，非常に狭い視野から戦争がとらえられたことも否定できない。だから戦争は人間の抵抗し得ない，超絶的なメカニズムとして現出する。これは確かに一つの戦争解釈ではあるが，この限りに留まるならば，個人的体験の域を出ない。処女作の発した絶叫が響き渡ったとき，ベルは一歩退いて改めて考え直す。第二作『旅人よ，汝はスペ、、へ赴くか』に含まれた，戦争をテーマとする若干の短編は，第一作のように戦争を死の恐怖というような一面性で観察せず，その種々層において検討し始めたベルの態度を示唆している。重傷を負った若い兵隊が臨時の負傷兵収容所へ運び込まれる。苦痛にさいなまれ意識も混濁しかかったこの兵隊が痛みの合間に気づいてみると，この収容所は彼がたった三カ月前に出たギムナジウムであった。彼の脳裏に学校当時の生活がきれぎれに浮かんでくる。軍医が彼の左足を切断しようとするとき，彼にはなぜ自分が曾て学んだギムナジウムに居るのかわからない。彼の追憶と現実は一致しない。これは既にドイツ国内にまで戦線が延びてきた時期の一齣である。戦争が若いギムナジウム卒業生の過去を圧し潰したのである。あるいは占領地での退屈な軍務と孤独，また周囲の敵意に耐えかね度を過して滅茶苦茶な飲酒に耽ける兵隊の話，フランスの寒村で連日繰り返される退屈な教練とドイツ兵相手の日常に心まで疲れ切ったバーの女将ルネの話，菓子を売るロシアの子供をも「民間人」だからといって兵営内への立ち入を禁止するドイツ軍隊の話等，戦争は様々な断

面で寸描されている。ここには主観的感情の強調はなく，距離をおいて戦争の実体をじっくり，しかも冷静に観察する作者の姿勢がのぞいている。この短編集には「戦争」をテーマとする短編の他に「戦後の混乱」を描いたものも相当あることから，ベルの関心がもはや直接的な戦争現象だけに向いているのではないと想像される。『使者』(Der Bote) は戦死した戦友の家を尋ねその妻に悲報を告げる復員者の話である。夫の留守中に他の男と関係を持っていたこの妻が，一旦夫戦死の報を耳にすると，悲涙を抑えきれないのである。こうした悲哀を背後に去っていく使者が自分にいい聞かせる言葉はこうである。

> Da wußte ich, daß der Krieg niemals zu Ende sein würde, niemals, solange noch irgendwo eine Wunde blutete, die er geschlagen hat. (Wanderer. S. 75)

この言葉は「使者」の感慨だけにとどまらず，作者ベルの戦争観の拡大をも示している。戦争という巨大な現実はアンドレーアスの苦悩だけでは覆いきれず，さらに広い視野からの解釈を要求する。したがってベルがこの短編集の中で「戦争」と「戦後の混乱」の二つのテーマを同時に扱っているのは，時代の問題に対する安易な好奇心からなされたことではなく，戦争の問題を一層深く，一層多角的に追求しようとする現われである。だが多角的な追求ではあっても，この短編集全体を通じて戦争肯定的な要素はいささかも見出されない。戦争はあくまで不条理な，退屈きわまる重苦しい現象としてしか姿を見せず，英雄的行為とか，機械化部隊の壮烈な戦闘等はぜんぜん描かれない。既に題名の意味からしても作者の戦争観が否定的なものであることは明瞭である。戦争末期，敗走を続けるドイツ軍の兵士達がヨーロッパで唯一つ安全な国と夢想し憧れたのがスペインであった。なんとかして安全な隠れ家であるスペインへ行きたいという気持は戦争放棄や戦争嫌悪に通ずる。

ベルの戦争観に総括的，究極的な表現が与えられたのは長篇小説，「アダ

ムよ，お前は何処に居たのか」においてであった。彼はこの小説の巻頭にテオドール・ヘッカー（Theodor Haecker）とアントワーヌ・ドウ・サンテグジュペリ（Antoine de Saint-Exupéry）の言葉を引いてモットーとしている。ヘッカーはキリスト者の立場から，人間が神の前にあって身の証を立てようとするとき，戦争は決してアリバイにならぬことを強調する。「アダムよ，お前は何処に居たのか」という神の問に対して，「私は世界大戦に参加しておりました」という答はごまかしでしかない，というのである。一方，サンテグジュペリは戦争が人間の冒険ではなく，たかだか冒険の代用品にすぎぬ，と断言する。いや「戦争は一種の病患だ，チブスのような病患だ」ときめつけ，これを拒否するのである。こうしたモットーからしてもベルの意図が容易に読み取れよう。

この作品は長編小説（Roman）と銘打たれているが，構成の点から見ると，それぞれ内容的に独立した九つの短編からなり，その相互の連絡には必然性がない。全体を通じて一貫する，緊密な筋の進行が見られず，登場人物相互の間の関係にも発展が欠け，長編小説というには余りにも各短編が自立しすぎる感じがある。若い兵士フアインハルス（Feinhals）は一見この小説の主人公と思われるが，第一作のアンドレーアスの場合とは違って，その運命が集中的，排他的に描かれず，他の短編に登場する人物と同等の扱いを受けているにすぎない。あえて全編に共通する要素を求めれば，それはドイツ軍の敗北間近い東部戦線しかない。各短編に出没する人間は，軍人たると民間人たるとを問わず，この舞台上に存在する。してみると問題となるのは東部戦線という空間であり，この意味でヴォルフガング・カイザー（Wolfgang Kayser）の説く「空間小説」（Raumroman）の要素が支配的である。九短編がモザイク像の一片のようにそれぞれ東部戦線を描写すると，この巨大な空間が浮かび上ってくる。もちろん空間とはいっても純粋に地理学的な空間そのものが問題となっているのではない。むしろこの地理的空間に意味を与えているもの，すなわち戦争に焦点が置かれている。こうした点から，今あえ

て小説の主人公を求めれば，それは戦争自体であるということができる。赤軍の大反攻にあって日増しに圧迫され，後退し続けるドイツ軍将兵とそれを傍観する占領地域の人々の両者を通じて，戦争という主人公が次第にはっきりと姿を現わしてくる。

敗北に憔悴しきってもはや何らの確信もなく，ただ習慣的に命令し，部下を死地へ追いやる将軍や将校達。疲労のあまり戦意を失い自分の運命を呪いながら勝利の見込ない戦闘に参加する兵士達。戦時中の味気なく張合いない退屈な日常を送る民間人。隠れ家を襲われ強制収容所へ送られナチスの親衛隊に虐殺されるユダヤ人達。こうした人間達の行為が戦争を全体的に浮かびあがらせるのである。倦怠，嫌悪，憎悪，自暴自棄がこの小説の基調をなし，重苦しい灰色の雰囲気が全編を覆っている。ここには感情の昂揚や精神の緊張，生命の渇望や死の恐怖も見られない。戦争が人間の精神を侵し毒したのである。

駐屯地での無為で退屈な日常を紛らすため，ブランディの飲み方を工夫して一種の儀式を作りあげる兵士。戦線後退で危険が迫ると，真先に一切合財の所持品を車に積み込ませて逃げ出す地区司令官。あるいは胃ノイローゼのために幼児的反応を見せる将校。戦前は一介の給仕で今はナチス党員として将校にまで昇進し，権力行使が最も大きい喜びとなっている男。戦争は人間の弱点や欠陥を白日の下にさらけだす。

スーザン夫人はもう三年間，戦争を見守ってきた。最初ドイツ軍の進撃があり，これが一段落すると平穏な日常生活が戻ってきた。彼女の家に一個分隊のドイツ兵が宿泊し村内警備にあたる。平穏な村の生活の中で彼等は連日退屈そうに巡邏し，汗を流して教練に励む。スーザン夫人の家計は彼等の宿泊で豊かとなるが，彼女の娘は一人の兵士と好い仲になり妊娠してしまう。この頃ドイツ軍は村内で架橋工事を始め，この田舎では見たこともないほど人夫が大勢集まり，トラックが大量の資材を運搬してくる。工事はみるみる進捗する。スーザン夫人は娘と共に工事人夫の賄を引受け多忙である。ちょ

うど工事が終り，橋が立派に完成した日，パルチザン来襲の報が入り，ドイツ軍は何のためらいも見せず完成したばかりの橋を爆破してしまう。スーザン夫人はこの巨大な浪費に驚くばかりである。ドイツ兵は急遽撤退し，彼女の娘は臨月間近の大きな腹をかかえて泣き出すばかりである。これは民間人の眼に映じた戦争の浪費と無意味である。

以上のような灰色の戦争描写の中で唯一の希望の燈火は，フアインハルスとユダヤ人少女イロナ (Ilona) との間に芽生えた愛情である。フアインハルスが勤務している司令部は以前ハンガリー人の女子高等学校であった。彼はある日ここで偶然イロナと知合いになる。彼女はこの休校している女子高等学校の教師で，ドイツ語を担当していた。彼等の間に淡い愛情が芽生えて，フアインハルスの灰色な生活の中に一点明るみが生ずる。だがユダヤ人強制収容の嵐が吹きまくり，イロナはユダヤ人地区に残してきた伯母の安否を気遣ってフアインハルスの許を去ってゆく。彼女は逮捕され強制収容所へ送られる。彼等の愛が烈しく燃えあがる時間はなかった。だが両人とも互の面影を心に刻みつけてそれぞれの運命の道を歩んでゆく。ここに第一作の虚構的な愛情とは違って，自然な人間の感情が見られる。二人の関係は真実性をもって描かれるが，イロナ個人についてみるなら，そこに一種の理想が投影されていることも疑いない。イロナは修道院で教育された。もし望むなら修道女となってアルゼンチンへ渡り，教育者となることもできた。強制収容所へ送られ，さらに虐殺される運命を免れることもできたのだ。しかし彼女は結婚し子供を育てたいという強い欲求を抑えられなかった。危険を承知でハンガリーに残ったのはこのためであった。女性として最も自然な，本来の希望のために彼女は破滅の淵へ引きずり込まれた。この点に戦争が人性を否定する営みであることが如実に示されている。また彼女が収容所で幼い子供を庇って殺されることは単なるヒロイズムではなく，犠牲の理想を象徴しているものと考えられる。愛情，家庭，犠牲などは，後の作品で明らかにされるが，作家ベルのモラルの基盤をなしている。だからイロナという女性の中に

ベルの理想がかすかに浮き出しているのである。フアインハルスが彷徨の末に生れ故郷へたどりついたとき，彼の望みはできるだけ静かに暮し，イロナに似た女性を見つけて結婚することであった。彼は我家の寸前で無意味な国防組織の連中が投げた手榴弾のために死ぬ。結局，二人の愛情も事実上は破壊されたけれど，愛情が戦争による人間破壊に抗する唯一の力であることは否定されない。

以上のように自分の体験を越えてベルは戦争を冷静かつ客観的に観察した。彼は作家としても成長し，その問題意識も拡大されたのである。ベルには戦争（Krieg）が戦後（Nachkrieg）をも含む広範な奥深い現象として意識される。

「戦後の混乱」を扱った第二の作品系列において第一に取り上げられた問題は復員者（Heimkehrer）の社会適応である。前に触れたように，短編集『旅人よ，汝はスペ、、へ赴くか』は戦後をテーマとする短編を含み，第二系列の作品に至る中間的，過渡的な位置を占めている。こうした推移を特にあきらかに示す短編が『商売は商売』（Geschäft ist Geschäft）である。この短編の主人公は若い復員者である。彼が戦争直後の混乱の中で知り合いとなり，親しい共通感情すら覚えたことのある闇屋のエルンストが足を洗って普通の商売を始めた。主人公が以前のよしみから何気なく近寄ると，エルンストは彼のみすぼらしい身形を眺めそしらぬ顔をして取りあわない。またエルンストは駄菓子を買いにきた少女に銭が足らぬと怒鳴りつけこれを追い払ったりする。こうしたエルンストの変貌ぶりにあきれた主人公は離れた街角に立って想にふける。彼もやはりアンドレーアスやフアインハルスと同様，人生の門口に立ったばかりの時，否応なしに戦争の中にひきずり込まれ，商人になろうという希望の潰えた男であった。軍隊の中では要求されたことを残らずやり遂げねばならなかった，勿論皆も一緒にやったことだった。だが敗戦後，瓦礫の山と化した故国へ戻ってみると，何に手をつけて良いのか，ど

んな仕事をしたら良いのか皆目見当がつかぬ。年輩の連中と違って彼には何一つ身についた職がない。他の者は復員してみると幸い家も戦災を免がれ，家族も健在であった。保険は引続いて有効だし，以前の職場も席を空けて待っていてくれた。ほんのちょっぴり非ナチス化（entnazifizieren）の手続を済ませ，彼等は心も軽く何事もなかったかの如く市民生活に復帰する。しかし何一つ身につけず，若い精神や精力を戦争のために消耗した人間にはどういう道が残っているのか。一旦，秩序の枠外へ押し出された人間が，どうしてとまどいも覚えず心の痛みも感ぜず易々と元の秩序の中へ戻ってゆけるか。この短編は，戦後の混乱を扱った最初の小説『だが何もいわずに』の問題を先取している。フレート・ボーグナー（Fred Bogner）は戦争中六年間絶え間なく野戦電話の交換手を勤め，「退屈に酔った」男である。復員後カトリック教会の事務局に勤めやはり電話交換手として働いている。給料は安く，妻と二人の子供を抱えた彼にはわずか一部屋で暮す以外に手はない。家主は偽善的なカトリック教徒で教会の参拝は欠かさないが，一部屋暮しのボーグナー一家には事々に厭がらせをいい，家事のことまで干渉する。こうしたみじめな一部屋暮しに耐え得ず，フレートは家を離れ友人の家に泊ったり，あるいは浮浪者まがいに駅の待合室で一夜を明かしたりしている。家へ帰って子供達の前に己のみじめさをさらけ出すのが怖ろしいフレートは，給料を人伝に家へ送り，妻ケーテ（Käte）には電話で連絡して安宿の一室やあるいは戸外で出会っている。フレートは自分のみじめさを充分に意識しているために，狭い一部屋の中で貧乏な暮しを続ける妻や子供達を見ていることが出来ぬ。子供を愛撫する代りにヒステリックな怒りに身をまかせてしまう。それが彼には耐えきれぬ。家庭を離れたフレートは飲食店で安酒を飲みながらパチンコまがいの遊戯にふけって現実の苛酷さを忘れようとする。この小説は復員者の社会復帰困難とこれを増大させる冷酷な社会を問題としているが，ボーグナー一家の悲惨な生活は必ずしも戦争のもたらした重荷によるものではない。フレート自身の弱い性格が間接的な原因となっている。少年時

代，母の死によって彼の精神は深く揺り動かされ，いかなる仕事にも情熱を見出せない，精力に乏しい男となってしまった。彼は本来結婚して家庭を築くべき人間ではなかったのかもしれない。こうした性格の弱い男と一緒に暮す妻は貧しい生活のきりもりをしながら，毎日きたない部屋の中でごみやほこりと際限のない闘いを続ける。彼女は近隣の口さがない誹謗に耐え，子供達を育てていく。彼女の支えとなるのは，夫がいつか再び家庭へ帰って来るだろうという望みである。こうしたフレートとケーテの関係に注目すればこの小説は本質的に「結婚小説」(Eheroman) であるということが出来る。だからこの小説は構造上フレートとケーテの二人を別々に描き出し，事態に二つの側面から照明を与えている。性格の弱さから夫が狭苦しい一部屋暮しの生活に耐えて生き抜いて行こうとする気のないことを見抜いた妻ケーテは，何事もいわずにひたすら子供達の為に生きてゆこうと決心する。しかもこの時彼女は三番目の子供を身籠っているのである。己のかぼそい美的感覚のみを頼りに生きてきたフレートもある日街角で偶然ケーテを見かけ，その淋しい美しさに心を動かされる。その時彼は自分の居るべき場所が家庭にしかないことを直覚して改めて家へ帰る。これがこの小説の終末である。フレートが帰宅したからといって彼等の生活が物質的に改善されるわけではない。一部屋暮しは相変らず続くし，家主の厭がらせも止むことはない。しかし気の弱い，生活能力に乏しいフレートにとって唯一の救いは妻ケーテとの結合であり，その上に築かれた家庭である。こうした結婚の理想化はベル自身のモラルに基づいた一つの信仰である。ベルがこの小説で貧しくちっぽけな人間を主人公としたことは，戦争小説の中で戦争の進行とは無関係な兵士達を中心に据えたことと軌を一にしている。貧しい小市民は社会の欠陥に敏感に反応する地震計なのである。この小説の題名は黒人霊歌から取られたもので，意味するところは，何一ついわず十字架上の人となったイエス・キリストの深い愛と犠牲である。ケーテの決心にはこの愛と犠牲が窺われる。そしてこの点にこそこの小説の宗教性が見られるのである。具体的なカトリック批判や

風刺はたかだか表面的な問題にすぎない。フレートとケーテの二人は別々にある屋台の給仕娘に強くひかれる。フレートは，貧しいが清潔な身なりの給仕娘が早朝の教会で白痴の弟を傍におきながら神に祈る美しさに魅せられ，彼女の後を追いその屋台へやってくる。ケーテは夫に会いに行く途中，偶然この屋台に寄って給仕娘の暖い心に感動する。手のつけられぬ白痴の弟を甲斐甲斐しく世話し，老いた父親の話相手となって心をやわらげてやるこの娘は，犠牲と限りない忍耐の象徴である。ケーテの心に犠牲の決心を生ぜしめ，フレートに再び神に祈ることを教えるのはこの名も知れぬ小娘なのである。こうした宗教性はもちろん作者ベルのカトリック信仰と無関係ではないが，これをもって直ちにカトリックの宗教性と断定する必要はない。これはカトリックの教条から生れた信仰表明ではなく，むしろベルのモラルに基づいた表現と見るのが妥当であろう。ベルの関心は，一方では熱心な教会参礼者でありながら，他方では貧しく弱い人々に一片の同情も持たぬ偽善的なキリスト者の正体暴露にある。その限りでは社会モラルの偽善性と物質生活に埋没した「有能な」人間達の指弾が主眼である。実際フレート達の最後の救いが家庭と信仰にあると設定することは，弱者に関心を持たぬ社会を間接的に批判することである。ベルの社会的関心が発した源は，人間の現実を直視することが作家の課題だという彼の信条にある。1952年に書かれた『廃墟文学信奉』(Bekenntnis zur Trümmerliteratur) と題する文章の中で，ベルは現実直視を強調し，それが作家の任務であると主張している。戦後の悲惨は瓦礫の現実に代表される。この現実をじっと見つめる辛さは大きいが，これが存在しないかのように振舞うことは許されない。戦後の現実の中で創作を開始した作家の道は現実直視しかないのだ。だが現実を見る目は乾き切った冷酷な目ではなく，ほんの僅かだが湿り気を帯びている。湿り気をラテン語では“Humor”という，すなわちユーモアだ。ベルはこうした観点から英国のチャールズ・デイケンズ (Charles Dickens) を現実直視の作家の典型として挙げている。しかし戦後の混乱をテーマとする第一作にはいささかのユー

モアも見出せない。ここでは怨恨（Ressentiment）が余りにも前面に出ている。従って社会批判自体も一面的になり偏狭の感を免れ得ない。

続く第二作の長編小説『主なき家』は社会批判の面では前作よりはるかに進んでいるが，小説構造を問題とすれば，統一性や緊密な筋の展開を欠き冗漫である。この小説の主題が戦争未亡人とその子供の運命であるところから，前作の主題との連絡は明瞭である。ケーテの立場は実質的に戦争未亡人の立場と余り変わらず，従って問題の連続は疑いない。

しかしこの第二作では大人達は背景へ退き，戦争で父を奪われた二人の少年，マルチン（Martin）とハインリヒ（Heinrich）が主人公となり，物語は二人の視点を通じて進行する。思春期に近い彼等の環境はそれぞれ異っており，著しい対照をなす。マルチンの家はジャム工場経営に関係し経済的に恵まれているが，ハインリヒの家では母がパン屋の手伝いをしながら辛うじて生計を立てている。両人の家に居る「小父さん」(Onkel) は本当の "Onkel" ではなく，他人である。マルチンの家のアルバート小父（Onkel Albert）は亡父と母親の親友で，主なき家の相談役である。一方ハインリヒの家に君臨するレオ小父（Onkel Leo）はいわゆる「小父さん結婚」（Onkel-Ehe）の相手で，ハインリヒの母と内縁の夫婦関係にある。こうした対照的環境にもかかわらず二人の少年は自分の母親をいずれも危惧に満ちた目で見守っている。マルチンの母，ネラ（Nella）は夫の戦死後，なに一つ生活上の苦労もないところから，夫の追憶にのみ生き，間断のない現実逃避と自己偽瞞の中でようやく時間を過し，奔放でとりとめのない刹那的な恋愛遊戯を繰り返えしている。彼女はマルチンを愛し，アルバートの好意も理解しているが，夢想から覚めてアルバートと結婚しマルチンの教育に専念する気になれない。恵まれた物質的条件と性格の弱さから彼女は市民生活へ復帰できないのだが，同時に彼女の放埒な生活態度が一面では鋭い社会批判に基づいているのも事実である。彼女はあのようにあっけなく破壊された幸福な市民生活なるものをもう二度と「演じたくない」のである。たしかに彼女は夢想的なタイプだが，そ

れだけに突き崩された幸福を嘆く気持も強く，また平和な生活の背後に潜む危険を敏感に知覚する。事実，再び落着いた社会にはこうした危険の徴候が見受けられる。マルチン達は学校で，ナチズムが決してそれほどひどいものではなかったと聞かされ，最悪の敵はロシヤ人だと教え込まれている。ネラの夫を詰らぬ虚栄心からむざむざ死地へ追いやった将校は，復員後過去の記憶を「組織的に」忘却し，キリスト教関係の新聞編集者となり，文芸評論家としての名声を得るに至っている。こうした社会の傾向をネラは見逃さず，感覚的に反撥する。一方ハインリヒの母は夫の死によって生活の物質的基盤を失った。戦後の混乱の中で二人の子供をかかえて生きてゆくために，次々と「小父さん結婚」の相手を探さねばならぬ。隣人達は彼女を非難し，不道徳を責め立てて彼女の生活を益々苦いものとする。だが生活の必要は彼女が無為に日を送るのを許さない。世間を恨み過去の追憶に溺れるわけにはゆかぬ。彼女の気苦労は現実的，日常的な問題にある。男に嫌われないためになんとか病める歯の治療費を捻出したいとか，電車車掌のレオを離れて富裕なパン屋の主人の誘に応じようかといった類の心配である。こうした母と幼いながらも生活の苦労を分つハインリヒには「結合」(Vereinigung) という綺麗な言葉に覆われた男女の関係がなにか暗く忌まわしいものと感ぜられる。何故母はあの傲慢なレオと同じ寝室に入るのか，何故自分達だけで暮せないのかという疑問がハインリヒの幼い心を苛むのである。彼はマルチンに比べてはるかに生活の苦労を味っており，幼いながらも額には苦悩の影がさしている。世の中の冷酷，不正，偽善あるいは男女間の忌まわしい関係など，まだ彼にははっきり理解できないが，早くも彼の心に暗い影を投げかけている。ハインリヒに比べてマルチンの疑問や不安はまだ子供じみたものだが，主なき家の陰影はここにもあきらかに認められる。彼の精神的発育にとって肝心なものは温い落着いた家庭であって，祖母の無理強いする子牛の料理ではない。

前作の個人的な社会非難はここで明白な社会批判へと変化した。新しい生

命に覆いかぶさる危険は貧乏な家庭でばかりでなく，経済的に恵まれた環境にあっても同様に作用する。問題は環境の相違にあるのではなく，少年達に共通な運命，すなわち戦争で父を失ったという運命にある。

戦後の混乱を題材とする最後の作品『若き日のパン』は前作の到達した地点から出発する。つまり戦後の困窮の中で成長した青年（ハインリヒの其後の姿と見てもよい）の感覚や精神，一言にしていえば魂の傷跡がこの物語のテーマとなっている。ヴァルター・フエンドリヒ（Walter Fendrich）には幼少の頃からパンに対する異常な執念があり，敗戦後の厳しい食糧事情はこの執念を益々熾烈に燃えあがらせた。ヴァルターは烈しい飢餓感に襲われて生きねばならなかった。ギムナジゥムを中途退学して機械工見習になっても彼の飢餓は一向に満されなかった。親方は腕の確かな専門工で表面的には敬虔な人間だが，同時に万事計算づくで取運ぶ抜目ない事業家でもあり，「商売にかけては容赦しない」男として知られている。他人に対する思い遣りがなく，自分達一家は美食しながら，徒弟職人達には得体のしれぬまずいスープを給するだけで能事終れりとする。利益を挙げるためには職人を使って無人の戦災家屋から鉄製品を盗み出すことも辞さぬ。そんな不正行為の最中，高い建物から墜死する職人がでても，その男の名前を給料計算簿から抹消するだけで平然としている。こうした冷酷で非情な親方の下に働くうちにヴァルターはいつしか羞恥心も良心も喪失してしまう。猛烈な飢餓に駆られて，親方の工場から物品を持出して売り払い，パンを買ったりする。この盗みは発覚したが，彼には謝る気持すらない。こうして彼はともかく見習期間を勤めあげ，洗濯機修理の専門工となった。世の中も落着き，彼ももう空腹に悩まされることがなくなったが，人間らしい自然な感情も失われ，無感動が彼の生活を支配する。親方は有能な洗濯機修理工となったヴァルターを娘の結婚相手として待遇するようになった，彼もまたその位置を拒否しようとしない。自己を喪失したヴァルターには万事がどうやら我慢できる程度なら文句もないのである。こうした無感動なヴァルターの生活はある日舞込んだ父親

の便りをきっかけに根本的に変化する。父親の同僚の娘ヘドヴィヒ・ムラー(Hedwig Muller)を駅に出迎えたヴァルターは，一目で彼女に惚れ込み完全に愛の虜となってしまう。この愛が彼の自己を回復させ，自然な人間感情を蘇生させる。親方の女婿の位置も生活の安定ももはや問題とはならない。彼は親方一家と袂別し敢然としてヘドヴィヒとの結婚に踏み切る。彼女の存在がヴァルターの閉ざされた心の扉を押し開き，自己と同朋への責任感を呼び起すのである。この愛の力によってヴァルターは覚醒し，現実を直視し始める。こうしてみると，これは世の常の恋愛物語ではなく，ベルがこれまで追求してきた現実直視の問題を土台とする愛の物語である。すなわち戦後の困難な時代に成長した若者の精神的な傷が愛によって癒されるのである。従ってヴァルターの若き日の飢餓は単にパンの問題だけにあったのではなく，暖い心，愛情の問題でもあったのだ。ベルの関心は従来のような社会批判の枠を越え，愛による人間の救済といった形の積極的な課題に向けられている。ベルが現実直視に飽き足らず生のモラルを説く態度に移ったことは疑いない。こうしたモラルに基づいてベルはいよいよ復興なった社会の現実を解釈しようとするのである。

かくてベルの作品系列は三番目の題材に到達する。『九時半の撞球』はたしかにこの系列へ組み入れられるが，その規模から見てこれまでの全作品に流れてきたベルの問題意識の総括として扱う方が適当と考えられるので，さし当り『アイルランド日記』と『ムルケ博士の沈黙蒐集』を取りあげてみよう。

前者が紀行文学に属し，後者が風刺短編集である事実から，ベルの問題意識がこれまでとは別な表現形式を求めていると考えられる。

『アイルランド日記』はベルが数度家族と共に訪れたアイルランドの見聞，観察，印象，感想をまとめた紀行文で，これまでの重苦しい社会的現実暴露とは違った，詩情溢ふるる，ユーモアに満ちた愉しい読物である。経済的に恵まれないこの国は昔から移民を大量に海外へ送り出すので知られ，今

日でも餓死の危険は去っていない。だがベルがこの国の住民に寄せる好意や愛情は行間に豊かに汲み取られる。またその裏には奇跡的な経済復興をなし遂げた西ドイツ社会への皮肉な態度が潜んでいる。特に作者は飢餓の恐怖や貧困にじっと耐え抜くアイルランド人の忍耐や落着きに惹かれているようである。神が時間をお造りになったとき，充分に時間を造られた，だが今の人間は何故にこうも忙しいのだろうか，とベルは悠々自適するアイルランド人の生活を眺めながら多忙な祖国を想う。どんな仕事でも遊びでも充分時間をかけるアイルランド人が怠惰だなどとは考えない。むしろ忙しがる祖国の人々は本当に時間の使い方を考えたことがあるのだろうか，とベルは産業的生活様式の支配する西ドイツ社会へ根本的な疑問をあびせる。この紀行文ではベルの西ドイツ社会風刺はまだ具体的な厳しさを帯びていない。ここではむしろ個人的にくつろいだ作家ベルの穏やかな見聞談が聞かれるのみである。多忙な産業社会へと復興なった西ドイツでの否定的な諸傾向に鋭い風刺や皮肉の矢を放つのは『ムルケ博士の沈黙蒐集』に集められた風刺短篇である。ムルケ博士は放送局に勤務して製作に関係している。彼は言葉の渦巻を逃がれるために録音テープの無音の部分を蒐集している。教会関係の有名文化人が自分の講演録音の中で「神」といったのを「至高なるもの」と置換えてくれ等と注文すると，ムルケ博士は家に帰って，蒐集した沈黙の録音テープを回転させるのである。多忙な，実質のない文化営業がここで徹底的に皮肉られる。また『何かやるのだ』（Es wird etwas geschehen）では例の方向を見失い勝なドイツ的勤勉が槍玉にあげられるし，『主都日記』(Hauptstädtisches Tagebuch) では再び抬頭してきた時代錯誤の軍隊賛美が笑い飛ばされる。こうした風刺はすでに1952年に出た『クリスマスの時ばかりでなく』（Nicht nur zur Weihnachtszeit）の中で試みられ，ベルがこのジャンルの優れた作家であることが示されている。今やこの社会批判の有効な武器が，復興された，過去を忘れたかに見える西ドイツ社会に向けられているのである。人間生活，特に社会生活の矛盾や欠陥の特徴を拡大誇張して

表現する風刺文学は大抵社会悪あるいは社会的な虚偽を筆誅するために用いられる。だが風刺は虚偽を真向から指摘し断罪するやり方ではない。それは対象と作者の間に一定の精神的距離を前提とするし，必ずしも積極的な現実変革への意志を含まない。『若き日のパン』の中で愛という積極的な対策を提示したベルにしてみれば，一歩後退した感じがある。だが，これは必ずしも後退ではなく視点の移動，あるいは関心の変化と見てよい。戦後の混乱が過去のものとなり，経済的復興が達成された今，一部屋暮しに象徴される生活の困窮は消滅した。声を大にして糾弾すべき社会問題あるいは時代の問題は一見もはや存在しないかに思われる。ベルが風刺のジャンルに手を伸ばしたのは，やがてドイツ社会像を描くための習作としてであったようだ。

『九時半の撞球』は復興した社会の内部に生きる人間の現実にのみ焦点をあてているのではなく，こうした現実を歴史的な規模で捕捉し，同時にその中に根ざす戦争の要因を明らかにしようとした作品である。戦争原因の究明とは，ベルの出発点に置かれた戦争体験が徹底的に追求された結果に他ならない。ベルはこの小説でこれまでの平明な口語調の文体を離れアレゴリックな言葉で語る。また，小説構造にはフランスのアンチ・ロマンの影響が明らかに認められる。同一の現実が数人の視角を通してそれぞれに切り取られ，モザイク的なイメージを構築する。回想は現在と交錯し，一元的で明確な輪郭をもった描写は見られない。これまでとかく平凡なレアリストと見られてきたベルには珍らしい手法上の実験が見られる。

ベルはここで貧しい小市民を離れ，始めて知識階級から物語の担い手を選んだ。このことは，身辺の困難労苦にのみ没頭して社会的な連関を遂に認識しない小市民の立場では，社会の全体像が描き難いこと，つまりベルの意図がドイツ社会の総合的な把握にあることを示唆する。小さな哀れな人々は「小羊」(Lämmer) と呼ばれ，社会的変革の出来する度に仮借なく犠牲とされる。「小羊」に取立てて同情や憐憫を感じないのが大多数の群衆で，その時々の権力——これは「愚物」(Büffel) と呼ばれる——に唯々諾々と服従し

追従する。彼等は「愚物」の追従者としての位置に甘んじ，権力の命令を忠実かつ熱心に遂行し，自分達の行為の意味を反省することがない。こうした群衆は個人としてみれば親切でにこやかな人間であり，世のつき合いも上手なのだ。彼等の関心事は常に他人や世の中と協調して生きることである。彼等は「愚物の秘蹟」(Sakrament des Büffels) を味って生きる。ナチズムが権力の座にとどまるかぎり，なんの思慮も凝らさずその配下に立ち，その要求するところを懸命に果そうと努めるが，戦に敗れ他の勢力——たとえば民主主義——が支配し始めると，なんらの良心の呵責も覚えず，いささかの懸念も持たず馬を乗り換える。しかもこうした人間がいつの時代にも社会の人間の大多数を占める。定見も節操もない群衆の中にベルは社会不正を許容し，偽善的モラルを維持し，果ては戦争を惹起する根源を見ている。本編の主要な担い手，ローベルト・フエーメル (Robert Fähmal) を尋問したアメリカ将校はこうした群衆の無定見を皮肉って次のようにいう。

> ". . . die Unschuldbeteuerungen sind mir schon zu geläufig und offengestanden auch zu langweilig. Ich habe schon zu meinem Kameraden gesagt, wir werden in diesem schönen Land nur fünf oder sechs, wenn's hochkommt neun Schuldige finden und uns fragen müssen, gegen wen wir diesen Krieg geführt haben: gegen lauter einsichtige, nette, intelligente, sogar kultivierte Menschen . . ." (S. 173)

本編の主要人物ハインリヒ (Heinrich) 及びローベルト・フエーメル (Robert Fähmel) 父子はそれぞれニュアンスの違いを見せながら「愚物一派」たる群衆に対置されている。父子二代にわたる良心の苦悩が繰り拡げられる。1907年出世欲に燃えて田舎からこのラインラントの都会——多分ケルンがモデルであろう——へ出てきたハインリヒは，この都会を征服しようと決心する。建築家としての彼は着実に己の計画を遂行し，この都市の支配階級から妻を迎えフエーメル一家を築く。年老いた家長として大家族の上に君

臨するのを夢見つつ，彼は次々にまやかしと知りながら，寺院や修道院を建築する。己を伝説的な人間に仕立て上げんとする家父長的欲求から，彼は自分の嗜好を問題外として喫茶店クローネで毎日きまった献立の朝食を摂る。彼の征服計画は少くとも出世に限定するなら成功した。だが二度の大戦が彼の家庭を引き裂いてしまう。良心的な人間として生涯唯一度も「愚物の秘蹟」を味いはしなかったが，「小羊」たちのために「牧夫」(Hirt) の役割を引受けることも決してやらなかった。彼は専ら自己に熱中し，自分を生きながら伝説化する目的だけを追求したのだった。群衆にはただ皮肉な態度を取るだけで敢えて行為をしない「独奏者」(Solist) にとどまった。だがナチズムの時代になると彼の生活にも変化が生じる。もう一人の息子オットー(Otto) が「愚物の秘蹟」を味わい，息子の「抜け殻」(Hülle) となってしまった。ローベルトは官憲に追われてオランダへ逃げ，その妻は空襲の犠牲となった。さらに自分の妻を精神病院へ入れねばならなくなった。時代の波がこうして彼の一家に及んだ時，彼は始めて自分の人生の誤謬をさとるのである。一方ローベルトは始めから「小羊」たちの「牧夫」であった。労働運動に参加した十八才足らずの少年労働者が死刑になった事実は，彼の若い精神を激しくゆさぶる。彼は敢然として労働運動に身を投じ，やがて官憲に追われてオランダへ脱出した。だが父親の取なしで許されて帰国した時，彼の心は頑な反抗を秘めていた。大学に通い工学のドクトルとなった彼は技術将校として駆り出され，「射撃視野」(Schuβfeld) を拡げるという名目の下に家屋や寺院や修道院を静力学の法則を利用して片端から爆破するのである。ローベルトにとってこうした爆破は「愚物一派」である群衆への痛烈な復讐であった。彼が，父親の建築した聖アントン修道院をたいした作戦上の必要がなかったにもかかわらず敢えて爆破したのも全く同様の心理に基づく。父親の名士としての影響力を承認しながら他方では友人シュレラ (Schrella) 等の「小羊」を仮借なく追いつめる群衆に対して，名建築とはやされるこの修道院を破壊することが彼の立場において可能な唯一の抗議であった。この修道

院の故意の破壊のために，彼は戦後アメリカ軍の尋問を受ける。父親に対するなにかのコンプレックスからこの行為に及んだのかというアメリカ的な解釈に対してローベルトがあくまでそれを否定するのは，彼がまさに上記のような心理にあったことを示している。だがローベルトのこうした復讐は所詮個人的な感情の満足でしかない。彼は戦後再び静力学に基づいた建築設計の職業に立戻るが，旧友とは交際せずひっそりと自分の内部に閉じ込もり，父親とすら往き来しない。プリンツ・ハインリヒ・ホテルで午前九時半から唯一人コニャックを愉しみながら撞球をするのが日課となってしまった。「小羊」たちの「牧夫」たらんとして果たせず，破壊の中に自己の情熱を燃やし尽したローベルトは，父親がクローネで摂る形骸化した朝食と同じ性質の偏執性に陥込んだのである。だが旧友であり，亡妻の兄であるシュレラが亡命から帰ってくる日，母が精神病院を脱け出して父の誕生祝にやってくる日，フエーメル一家の偏執は破れ去る。ローベルトの息子が祖父の跡をついで聖アントン修道院の再建に働き，建築学の勉強を始めることにしたのだった。ローベルトの工事設計に計算の誤りがあったという報せがやってくる。工事設計ばかりでなく彼の人生にもやはり未知数が潜んでいたのである。精神病院からやってきた母は，隣の建物で選挙運動をやっている代議士が「愚物」でやがては戦争を惹き起す人間だ，と信じ込み銃をとってこの男を射つ。この終末は精神病の発作ではなく，「愚物」やその追従者たる群衆の動きへ加えられた痛撃を象徴しているのである。

ベルは復興した社会を中心に描きながら，戦争の真の原因が人間の心に宿り，弱いちっぽけな人間への愛情が失われた世界に根ざすものであると語る。『九時半の撞球』はこういう点でベルの戦争体験の総決算であり，彼のモラルを最も明確に示した作品といえよう。『列車は定刻運転だった』に始まる彼の問題追求はここでようやく解決を得た。戦争は人間の支配し得ぬデモーニッシュな存在ではなく，人間が自分の力で阻止できる人間的な問題なのである。

以上がベルの作品を要約的に回顧したものである。彼の文学の根底には抽象的な形而上の問題とは無縁な庶民的現実感覚があり，これが口語から磨きあげられた平明で形象豊かな文体と相俟ってベルの独特な魅力をつくり出す。

『ツアイト』の寄稿が伝えるように，一般に物語性を受好し，とかくドイツ作家の抽象過剰に反撥しがちな英国読書界にあっても，ベルが有望な作家と目されている事実は偶然ではない。だが，作品の思想を文学評価の中心に置く傾きのあるドイツ的文学趣味は，ベルの仕事を認めつつも，彼を純粋な作家 (Dichter)，真剣に取り上げるべき作家とは見做さないようである。この点についてはいずれ他の機会に検討してみたい。

Literaturangabe

Bölls Werke:

Der Zug war pünktlich. Middelhauve, Opladen 1958.

Wanderer, kommst du nach Spa ... Ullstein, Frankfurt/M. Ullstein Bücher Nr. 322.

Wo warst du, Adam? Ullstein Bücher Nr. 84.

Und sagte kein einziges Wort. Ullstein Bücher Nr. 141.

Das Brot der frühen Jahre. Ullstein Bücher Nr. 239.

Haus ohne Hüter. Ullstein Bücher Nr. 185.

Irisches Tagebuch. Deutscher Taschenbuchverlag, München 1961.

Billard um halbzehn. Kiepenheuer und Witsch, Köln 1959.

Doktor Murkes gesammeltes Schweigen. Kiepenheuer und Witsch, Köln 1961.

Literatur:

Der Schriftsteller Heinrich Böll. Kiepenheuer und Witsch, Köln 1959.